

令和3年度 佐賀県施肥・病虫害防除・雑草防除のてびき
 <麦類・野菜・花き・飼料作物>
 ー施肥ー

目 次

◎ 施 肥	1
I 麦類施肥	1
A. 小 麦	1
B. ビール大麦	4
C. 普通大粒大麦	5
D. はだか麦	6
II 野 菜 施 肥	7
1. キュウリ（促成、半促成、抑制）	10
2. キュウリ（夏秋）	10
3. 丸トマト（促成、夏秋、抑制）	11
4. ミニトマト（促成、抑制）	12
5. ナス（促成、夏秋）	12
6. ピーマン（夏秋）	13
7. イチゴ（促成）	14
8. タマネギ	15
9. 小ネギ（周年）	16
10. 根深ネギ（春まき）	16
11. ワケギ	17
12. アスパラガス（ハウス）	18
13. ハクサイ（冬どり）	18
14. チンゲンサイ（周年栽培、施設）	19
15. キャベツ（冬どり、秋どり）	20
16. ブロッコリー（早出し・普通）	20
17. レタス（夏秋、冬春）	21
18. ホウレンソウ（雨よけ）	22
19. バレイショ	22
20. ショウガ	23
21. サトイモ	23
22. カンショ（早堀、普通）	24
23. レンコン	24

24.	<u>スイートコーン（普通、トンネル）</u>	25
25.	<u>エンドウ（普通、露地抑制）</u>	26
26.	<u>ソラマメ（普通）</u>	26
27.	<u>モロヘイヤ（秋冬・春夏）</u>	27
28.	<u>パセリ（夏秋）</u>	27
29.	<u>コマツナ（雨よけ）</u>	28
30.	<u>スイカ（半促成、露地）</u>	29
31.	<u>メロン（半促成）</u>	29
32.	<u>カボチャ（抑制、トンネル、普通）</u>	30
33.	<u>インゲン（抑制・半促成）</u>	30
34.	<u>ニンニク（普通）</u>	31
Ⅲ	<u>花き施肥</u>	32
1.	<u>キク（施設、露地・雨よけ）</u>	33
2.	<u>バラ（加温同年型：養液栽培）</u>	34
3.	<u>カーネーション（加温同年型）</u>	35
4.	<u>トルコギキョウ（促成、半促成、夏秋）</u>	36
5.	<u>ホオズキ</u>	36
6.	<u>スカシユリ</u>	37
7.	<u>オリエンタルハイブリッド</u>	37
8.	<u>グラジオラス（促成、普通、抑制）</u>	38
9.	<u>ストック</u>	38
10.	<u>シンテッポウユリ</u>	39
11.	<u>シュッコンカスミソウ</u>	39
12.	<u>スターチス・シヌアータ（促成、半促成）</u>	40
13.	<u>スイートピー</u>	40
Ⅳ	<u>飼料作物施肥</u>	41
1.	<u>イタリアンライグラス</u>	41
2.	<u>エンバク</u>	41
3.	<u>飼料用イネ（稲発酵粗飼料用）</u>	42
4.	<u>飼料用トウモロコシ</u>	43
5.	<u>ソルガム</u>	44
6.	<u>夏作牧草</u>	44
7.	<u>多年草牧草</u>	45

施

肥

- 麦 類
- 野 菜
- 花 き
- 飼 料 作 物

効率的な施肥の推進

環境に対する負荷を軽減し、施肥量をできるだけ削減するため、稲わら・麦わらや家畜糞尿など有機物資源を有効に活用した土づくりを励行して地力の向上を図るとともに、土壌診断により土壌の養分量を把握し、養分の残存量や生育状況にあわせた効率的な施肥に努めることが重要である。

- (1) たい肥等の有機物資源を適切に施用するため、土壌診断を実施し、その結果に基づいて土壌の性質の改善に努める。
- (2) たい肥等を施用する場合は、窒素分量や化学肥料代替率を考慮して施肥量を補正する。
- (3) 土壌診断や栄養診断等の実施により土壌養分量や作物の生育の状況に合わせた、きめ細かな施肥を行う。
- (4) 局所施肥や肥効調節型肥料の利用等により、環境等に対する負荷を軽減した効率的な施肥に努める。なお、肥効調節型肥料を使用するにあたり、従前の樹脂コーティングされた肥料を使用する場合は圃場外に流出させないよう環境に配慮するか、微生物分解性のコーティング肥料を使用するよう努める。

I 麦類施肥 [\[目次に戻る\]](#)

～稲わら・麦わらの有効活用に努めよう～

A. 小麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量（シロガネコムギ）[タンパク基準値 9.7～11.3%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量			備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	
平坦	450kg	14kg	8kg	10kg	5.5kg	4.5kg	4kg	中間追肥1月上旬 中旬、穂肥3月上旬
山麓	400	13	8	9	6.5	4	2.5	
山間(畑作)	350	11	8	8	6.5	2.5	2	

※4月上旬に葉色(SPAD値)が40以下の場合、子実のタンパク基準値が確保できないことが懸念されるため、穂揃い期(4月中旬)に窒素で2kg/10a程度の追肥を行う。

2) 地域別施肥量（チクゴイズミ）[タンパク基準値 9.7～11.3%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦上部 山麓	400～ 450kg	14kg	8kg	9kg	6kg	3kg	3kg	2kg	中追:1月上旬 穂肥:3月上旬 穂揃い期追肥: 4月上旬

3) 地域別施肥量（ミナミノカオリ）[タンパク基準値 11.5～14.0%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦 平坦上部	400kg	16kg	10kg	10kg	6kg	3kg	3kg	4kg	中追:1月上旬 穂肥:3月上旬 穂揃い期追肥: 4月中旬

※穂揃い期追肥については、P47の「ミナミノカオリ」の穂揃期施肥基準に基づいた施用とする。

4) 地域別施肥量（はる風ふわり）[タンパク基準値 11.5～14.0%]

(10a)

地域	目標収量	三要素(成分)			窒素施用量				備考
		窒素	リン酸	カリ	元肥	中間追肥	穂肥	穂揃い期追肥	
平坦 平坦上部	400kg	18kg	10kg	10kg	6kg	3kg	4kg	5kg	中追:1月上中旬 穂肥:3月上旬 穂揃い期追肥: 4月上中旬

※穂揃い期追肥については、必ず窒素施用量で5kg/10aを施用する。なお、穂揃い期追肥については、p49を参考にする。

5) 地域別施肥量 (さちかおり) [タンパク基準値 11.5~14.0%]

(10a)

地 域	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
		窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
平 坦 平坦上部	450kg	18kg	10kg	10kg	6kg	2kg	4kg	6kg	中追：1月上中旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上中旬

※穂揃い期追肥については、必ず窒素施用量で 6kg/10a を施用する。なお、穂揃い期追肥については、p 49 を参考にする。

6) 施肥設計上の要点

- (1) 水田、畑とも酸性土壌では pH6.0~6.5 に矯正するよう、苦土石灰等を施用する。特に圃場整備後の酸性硫酸塩土壌の場合には注意する。
- (2) 各地域において、気象、土壌、耕種法等が異なる場合には、この施肥量を基にして、地区毎に施肥設計をたてる。
- (3) 山麓ならびに河川の流域等の砂質土壌では、ややカリを増肥するとともに苦土を施用する。
- (4) 畑地などでリン酸吸収係数が高く、かつ天然養分供給量が乏しい土壌では pH を矯正しリン酸資材及び有機物を増施する。
- (5) 穂肥までに施用する窒素は3回の分施とし、元肥に 40%~60%、中間追肥は分けつ期 (3~4葉期) に 20~30%、幼穂形成期に 20~30% 施用する。施用法は播種期の早晚等、諸種の条件を考慮して決める。さらに、タンパク質含有率向上のために、必要に応じて穂揃期追肥を窒素成分で 2~6 kg/10a 施用する。穂揃期追肥の効果を得るためには時機を逸しないよう注意する。リン酸は全量元肥か 6~7 割を元肥とし、残量を分けつ期の追肥時期までに施用する。カリは2回分施か窒素と同様に3回分施でもよい。ただし、山間地帯では元肥の施用割合を多くする。
- (6) 元肥や中間追肥を基準より多肥にしても増収効果は少なく、成熟期の遅延・倒伏の助長及び屑麦の増加による品質の低下をきたすので施肥量を厳守する。
- (7) 1月以降の晩播は、この施肥量の 30% 減とし元肥を主体とする。
- (8) 排水がよく、条件が麦作に好適な地帯で、十分な管理をし、多収穫栽培をする場合には施肥量を増加してもよい。
- (9) 圃場整備直後の水田では、一般にリン酸が少ないので成分で 10kg 程度を増肥する。
- (10) 枯れ熟れや整粒の不揃いは、タンパク質含有率の不均一をもたらすので、適正な栽培管理に努める。
- (11) 専用の肥効調節型肥料の元肥施用により追肥の省略が可能である。ただし、施肥が遅くなると肥料の溶出が遅れるため、11月下旬までに播種を行う。
また、年次によっては生育にばらつきがみられることがあるため、留意する。
- (12) 稲わらを施用する場合には、窒素飢餓を防ぐため施用と同時に稲わら 100kg に対し窒素 0.4kg を加用する。一般的に稲わらは 600kg/10a 得られるため、窒素成分で約 2.5kg/10a

を施用するが、稲わらを3年以上連続して施用した水田では窒素の増施は必要としない。

(13) チクゴイズミの耐倒伏性はやや強であるが「シロガネコムギ」より弱い。

(14) パン用小麦は実需者から高いタンパク質含有率であることが求められているので、必ず穂揃期に基準の窒素量で追肥を行う（「ミナミノカオリ」4 kg/10a、「はる風ふわり」5 kg/10a、「さちかおり」6 kg/10a）。

(15) 穂揃い期追肥を尿素葉面散布で行う場合、赤かび病防除との同時処理を行っても薬剤の効果に影響はない。ただし、尿素6%以上の濃度の場合は葉や芒に焼けを生じる場合がある。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 品種別施肥量

(10a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
			窒素	リン酸	カリ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
平坦	シロガネコムギ	450kg	14kg	10kg	12kg	5.5kg	4.5kg	4.0kg	—	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬
	チクゴイズミ	400kg～ 450kg	14kg	10kg	12kg	6.0kg	3.0kg	3.0kg	2.0kg	中追：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	はる風ふわり	400kg	18kg	10kg	10kg	6.0kg	3.0kg	4.0kg	5.0kg	中追：1月上中旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	さちかおり	450kg	18kg	10kg	10kg	6.0kg	2.0kg	4.0kg	6.0kg	中追：1月上中旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬

2) 施肥設計上の要点

耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 品種別施肥量

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量				備 考
			窒素	リン酸	カリ	元 肥	中間追肥	穂 肥	穂揃い期追肥	
県 下 全 域	シロガネコムギ	420kg	12kg	8kg	10kg	6kg	3kg	3kg	—	中間追肥：1月上中旬 穂肥：3月上旬
	チクゴイズミ	420kg	10kg	8kg	9kg	4kg	2kg	2kg	2kg	中間追肥：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月上旬
	ミナミノカオリ	400kg	12kg	10kg	10kg	4kg	2kg	2kg	4kg	中間：1月上旬 穂肥：3月上旬 穂揃い期追肥 ：4月中旬
	はる風ふわり	400kg	15kg	10kg	10kg	4kg	2kg	4kg	5kg	中間追肥：1月上中旬 穂肥 ：2月下旬～3月上旬 穂揃い期追肥 ：3月下旬～4月上旬
	さちかおり	420kg	16kg	10kg	10kg	4kg	2kg	4kg	6kg	中間追肥：1月上中旬 穂肥 ：2月下旬～3月上旬 穂揃い期追肥 ：3月下旬～4月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 初年目の大豆のあと麦は生育量が大きく、倒伏しやすいので減肥する。
- (2) 大豆～麦を連続して栽培すると、土壤肥沃度が低下するので、大豆茎・莢や麦稈等の有機物を施用して地力増強をはかる。
- (3) 干拓地の畑作麦についても、この基準に準じるが、苦土質肥料の施用は控える。
- (4) その他の事項は、地域別施肥量の施肥設計の要点に準じる。

B. ビール大麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目 標 収 量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	サチホゴールド	400kg	12kg	8kg	10kg	6kg	4kg	2kg	中間追肥1月上中旬、穂肥3月上旬
山麓	サチホゴールド	350	11	8	8	5.5	3.5	2	

2) 施肥設計上の要点

- (1) 気象、土壤、耕種法等により、施肥量は若干増減してよいが、苗立数が多い場合は窒素を増施すれば倒伏などにより減収あるいは整粒歩合、品質低下のおそれがあるので慎重を要する。リン酸、カリについては小麦に準ずる。
- (2) 酸性土壤では特に生育、品質とも劣るので、p H6.0～6.5 に矯正するよう苦土石灰等を施用する。特に、圃場整備後の酸性硫酸塩土壤の場合には注意する。
- (3) ビール麦は苦土欠乏症を発生しやすいので、そのおそれがあるところは事前に苦土を施用する。
- (4) 追肥は、分けつ期（3～4葉期）に3～4割施す。
- (5) 緩効性肥料を施用する場合は全量元肥とする。ただし、施肥が遅くなると肥料の溶出が遅れるため、12月中旬までに播種を行う。
- (6) 稲わらを施用する場合には施用と同時に、稲わら 100kg に対しチッソ 0.4kg を加用するが、3年以上連続施用田では増施窒素分は必要としない。
- (7) 圃場整備直後の水田では、一般にリン酸が少ないので成分で 10kg 程度を増肥する。
- (8) ケイ酸、ケイ鉄などの土づくり肥料を稲作時に施用できない場合は、麦作時に施用する。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目 標 収 量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	サチホゴールド	420kg	14kg	10kg	11kg	7kg	5kg	2kg	中間追肥1月上中旬、穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒素施用量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
県 下 全地域	サチホゴールド	400kg	8kg	6.5kg	6.5kg	6kg	0kg	2kg	穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 初年目の大豆のあと麦は生育量が大きく、倒伏しやすいので減肥する。
- (2) 大豆～麦を連続して栽培すると、土壤肥沃度が低下するので、大豆茎・莢や麦稈等の有機物を施用して地力増強をはかる。
- (3) 干拓地の畑作麦についても、この基準に準じるが、苦土質肥料の施用は控える。
- (4) その他の事項は、地域別施肥量の施肥設計上の要点と同様である。
- (5) 山麓部の砂質土地帯で微量要素欠乏症が見られる場合は、土壤診断を実施し、微量要素を含む資材を施用する。

C. 普通大粒大麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 地域別施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	はるか二条	480kg	14kg	14kg	14kg	6kg	4kg	4kg	中間追肥1月上 中旬、穂肥3月 上旬
山麓	煌二条	350kg	11kg	11kg	11kg	5.5kg	3.5kg	2kg	
	はるか二条	420kg	12.5kg	12.5kg	12.5kg	5.5kg	4kg	3kg	

2) 施肥設計上の要点 ビール大麦に準ずる。

2. 全面浅耕平畦ドリル、全面全層播栽培の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	はるか二条	540kg	15kg	11kg	13kg	7kg	5kg	3kg	中間追肥1月上 中旬、穂肥3月 上旬

2) 施肥設計上の要点

- (1) 小麦ならびにビール大麦における耕起畦立栽培型の施肥設計上の要点と同様である。

3. 大豆あと作麦類施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	はるか二条	540kg	10.5kg	8.5kg	8.5kg	6kg	3kg	1.5kg	中間追肥1月上旬 中旬、穂肥3月上旬

2) 施肥設計上の要点

(1) 小麦における地域別施肥量ならびに大豆あと作の要点に準ずる。

D. はだか麦 [\[目次に戻る\]](#)

1. 耕起畦立栽培型の施肥

1) 施肥量

(10 a)

地域	品 種 名	目標収量	三 要 素 (成分)			窒 素 施 用 量			備 考
			窒 素	リン酸	カ リ	元 肥	中間追肥	穂 肥	
平坦	イチバンボシ	350kg	10kg	10kg	10kg	6.0kg	4.0kg	0kg	中間追肥は、 1月下旬

2) 施肥設計上の要点

ビール大麦に準ずる。

II 野菜施肥 [\[目次に戻る\]](#)

この施肥量は従来の主要野菜施肥量を土台に、九州地区野菜肥料研究会の基準、新産地の基準、試験結果を加味して設定したものであり各地区において気象、土壌、耕種法等が異なる場合には、この施肥量を参考にして地区毎に施肥設計をたてること。

◎ 施肥量を設定した作物の作型と主要品種

品目	作型	播種期	定植期	収穫期	主要品種	ページ
1 キュウリ	抑制	7月上旬～ 8月下旬	8月上旬～ 9月下旬	8月下旬～ 1月下旬	ニーナ、結実637 常翔661	10
	促成	9月上旬～ 10月上旬	10月上旬～ 11月下旬	11月上旬～ 6月下旬	ニーナ、結実637 常翔661	
	半促成	10月下旬～ 12月下旬	12月上旬～ 2月中旬	1月上旬～ 6月下旬	ニーナ、常翔661 極光607	
2 キュウリ	夏秋	6月上旬～ 7月上旬	6月下旬～ 7月下旬	7月中旬～ 11月上旬	ニーナ、常翔661 極光607	10～11
3 丸トマト	抑制	7月下旬	8月下旬～ 9月上旬	10月～1月	ソプラノ、感激73、サンロード、マイロック、麗容	11～12
	促成	8月上旬～ 下旬	9月中旬～ 10月下旬	12月中旬～ 6月		
	夏秋	4月上旬	5月中旬～ 下旬	6月下旬～ 11月中旬	桃太郎ヨーク、 桃太郎ファイト	
4 ミニトマト	抑制	6月中旬～ 下旬	7月下旬～ 8月上旬	9月中旬～ 12月	小鈴s p、CF千果	12
	促成	7月下旬～ 8月上旬	9月中旬～ 10月上旬	11月中旬～ 6月		
5 ナス	夏秋	2月下旬	5月上旬	6月下旬～ 10月	黒船、黒錦2号、筑陽	12～13
	促成	7月上旬～ 中旬	8月下旬～ 9月下旬	10月下旬～ 6月	筑陽、PC筑陽	
6 ピーマン	夏秋	3月上旬	5月上旬	7月上旬～ 11月上旬	さらら	13～14
7 イチゴ	促成	採苗6月上旬 ～7月下旬	9月上旬～ 下旬	11月中旬～ 6月	さがほのか、いちごさん	14～15
8 タマネギ	トンネル	9月中旬	11月上旬	3月	貴錦	15
	早生	9月下旬	11月中旬	4月～ 5月上旬	レクスター1号、スパート 七宝早生7号、アドバンス	
	中晩生	9月中旬～ 下旬	11月下旬～ 12月上中旬	5月中旬～ 6月上旬	ターザン、アンサー、 もみじ3号	
9 小ネギ	夏秋	5月～9月	—	7月～12月	鴨頭、冬彦、FDH、夏彦 ストレート、ふくいち葱 ブラックキング葱	16
	冬春	10月～4月	—	1月～6月	鴨頭、雷王、冬作葱、F DH、冬彦、ふくいち葱	

品目	作型	播種期	定植期	収穫期	主要品種	ページ
10 根深ネギ	春播き	3月～4月	6月～7月	10月～12月	長悦、吉蔵	16～17
11 ワケギ	夏どり		5月下旬～ 9月上旬	7月上旬～ 11月上旬	さが乙女	17
	冬どり		9月上旬～ 12月中旬	11月中旬～ 3月下旬	さがゆたか	
12 アスパラガス	ハウス	2月上旬	5月上旬	1月上旬～ 10月	ウェルカム	18
13 ハクサイ	冬どり	8月下旬	—	1月～3月	黄ごころ65, 75, 85、春笑	18～19
14 チンゲンサイ	周年	—	—	—	四季三昧、冬御前、ニーハオ	19～20
15 キャベツ	秋どり	8月下旬～ 中旬	9月上旬～ 中旬	11月～12月	いろどり、松波、夢舞台 冬武者、春空、おきな 銀次郎、冬勝利、冬藍 晩抽冬982	20
	冬どり	8月下旬～ 9月上旬	9月下旬	12月～2月		
16 ブロッコリー	早出し	7月上旬～ 中旬	8月中旬～ 下旬	10月上旬～ 1月上旬	ピクセル、彩麟、サマー ドーム、しき緑96号	20～21
	普通	8月上旬	9月下旬	11月下旬～ 4月中旬	エンデバー、しき緑96号、彩麟 おはよう、美緑410、晩緑99W	
17 レタス	夏秋	3月 8月～9月	4月 9月～10月	6月 10月～11月	ステディ、サウザー アストラル	21
	冬春	8月下旬～ 10月上旬	9月下旬～ 3月	12月上旬～ 5月	袖ヶ浦、ステディ、シスコF、 レガシー、レイヤード	
18 ハウレンソウ	夏秋雨よけ	3月上旬～ 10月中旬	—	5月上旬～ 11月上～下旬	ミラージュ、ヴィジョン、 トラッド7、トリトン、 ニュー進太郎、グリーン ホープ、マジエスタ、 スパイダー	22
19 パレイショ	春	—	1月下旬	5月下旬～ 6月上旬	メーカーイン、デジマ	22～23
	秋	—	8月下旬～ 9月上旬	11月～12月	デジマ	
20 ショウガ	—	—	5月上旬	9月～11月	大ショウガ	23
21 サトイモ	—	—	4月上旬	9月～12月	福頭、石川早生	23～24
22 カンショ	早掘チ	2月上旬	4月上旬～ 5月下旬	7月中旬～ 9月下旬	ベニマサリ、ベニアズマ べにはるか、からゆたか	24
	普通	3月上旬	5月中旬～ 6月下旬	10月上旬～ 11月中旬		
23 レンコン	ハウス	—	2月下旬～ 3月上旬	6月～8月	清秀、金澄20号	24～25
	—	—	3月下旬～ 4月中旬	8月～4月	金澄8号、岩国、さが白 祥、幸祝	

品目	作型	播種期	定植期	収穫期	主要品種	ページ
24 スイート コーン	トンネル	3月下旬	—	6月上旬～ 6月中旬	未来117	25
	普通	5月上旬	—	8月上旬～ 8月中旬	未来390	
25 エンドウ	普通	10月中旬	—	4月下旬～ 5月下旬	みささ、みささ2000	26
	露地抑制	8月上旬	—	10月上旬～ 12月下旬	みささ、みささ2000	
26 ソラマメ	普通	10月中旬	11月上旬	5月上旬～ 5月下旬	陵西一寸、唐此の春	26
27 モロヘイヤ	秋冬	9月	10月上旬	11月～3月	—	27
	春夏	2月～3月	3月～4月	4月～7月	—	
28 パセリ	夏秋	2月～3月	4月～5月	6月～2月	けさお、パラマウト	27～28
29 コマツナ	雨よけ	周年	—	周年	浜ちゃん	28
30 スイカ	半促成、 露地	1月上旬～ 3月上旬	2月下旬～ 4月上旬	5月～8月	富士光	29
31 メロン	半促成	1月上旬～ 2月中旬	2月上旬～ 3月上旬	5月下旬～ 7月上旬	アンデス、ホームラン	29～30
32 カボチャ	トンネル	2月下旬	4月上旬	6月中旬～ 8月上旬	えびす	30
	普通	3月中旬	4月下旬	7月上旬～ 8月上旬	えびす、みやこ	
	抑制	8月中旬	—	11月上旬～ 中旬	えびす	
33 インゲン	抑制	8月	—	10月～11月	キセラ	30～31
	半促成	2月	—	4月～6月	キセラ	
34 ニンニク	普通	—	9月中旬～ 10月上旬	5月中旬～ 下旬	嘉定種、(大蒼)	31

1. キュウリ（促成、半促成、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地域……佐賀平坦、天山松浦、杵島山麓、国見山麓、白石平坦、多良岳
- 2) 土壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 抑制：6,000kg 半促成：15,000kg 促成：18,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 合理的な施肥の実施にもとづき、極端な多肥とこれに起因した各種障害の除去
 - (2) 緩効性肥料の有効利用や、灌水と液肥の併用による施肥労力の節減
- 5) 施肥量（促成）

(10 a)

区分	総量 (成分)	元肥	根付肥	追肥
窒素	55kg	27.5kg	2kg	1回当たり2～3kgで15～20日間隔で施用
リン酸	30	27	3	—
カリ	45	24	—	1回当たり2～3kgで15～20日間隔で施用
施用期	—	定植10日前	定植前日	—

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 好適 pH6.0～6.5
 - (2) 浅根性のため、元肥は深さ 15 cm内外の全面全層に施用する。
 - (3) 生育期間が長いため、元肥は緩効性肥料が望ましい。
 - (4) 連作地では、1～2月苦土欠が起りやすいので、カリの多用をつつしみ、発生の場合には早めに苦土剤の葉面散布を行う。又、元肥施肥前の土壌分析に基づいて元肥量を決める。
 - (5) 二作型を行う場合の元肥はハウス抑制で 30%減、半促成では 20%減として施用する。
 - (6) 肥効調節型肥料を用いた、2作一発型施肥が可能である。

2. キュウリ（夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地域……天山松浦、佐賀平坦
- 2) 土壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 8,000kg
- 4) 改善目標

夏期高温期の長期間、根群機能を維持するため、腐熟有機物の施用と有効土層を深くし、排水性・保水性をよくする。

5) 施肥量 (雨よけ)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
			1 追	2 追	3 追
窒 素	40kg	20kg	6kg	8kg	6kg
リ ン 酸	30	30	—	—	—
カ リ	25	12	4	5	4
施 用 期	—	播種10日前	収 穫 始	1 追後 1 ヲ月	2 追後 1 ヲ月

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0~6.5
- (2) 施肥後土壤の過乾燥を防止する。

3. 丸トマト (促成、夏秋、抑制) [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……佐賀北部、天山松浦 (夏秋)

佐賀平坦、天山松浦、国見山麓 (促成、半促成)

佐賀平坦、白石平坦、上場 (促成、ハウス抑制)

2) 土 壤……砂壤土~埴土

3) 収量目標……10 a 当たり丸トマト (促成 12,000kg、半促成 9,000kg、抑制 9,000kg)

4) 改善目標

花芽の充実をはかるための育苗につとめ若苗定植をさける。

その他キュウリに同じ。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	夏 秋 (雨よけ)			促 成			抑 制		
	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	32kg	15kg	17kg	39kg	18kg	21kg	25kg	9kg	16kg
リン酸	25	25	—	25	25	—	20	20	—
カ リ	32	15	17	39	18	21	25	9	16
施用期	—	定 植 15日前		—	定 植 10日前		—	定 植 10日前	

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0~6.5
- (2) 好石灰作物であるため、pHの矯正を必ず行なっておく。
- (3) 深根性のため全層施肥がのぞましい。
- (4) 生育期間が長いため元肥は緩効性肥料が望ましい。
- (5) 壤土及び砂壤土では本施肥量の 10%増とする。

- (6) 尻ぐされ予防のため、葉面散布剤（石灰）の施用を行なう。
- (7) 追肥は3段花房開花期から2週間毎に1回当たりN成分で1kg前後でやる。
- (8) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培では、窒素成分量の15%程度が削減可能である。

4. ミニトマト（促成、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地域……県内平坦全域
- 2) 土壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当り 促成 9,000kg、半促成 7,000kg、抑制 5,000kg
- 4) 改善目標……根いたみのない充実した苗に仕上げる。
その他キュウリに同じ。
- 5) 施肥量

(10a)

区分	促成			抑制		
	総量(成分)	元肥	追肥	総量(成分)	元肥	追肥
窒素	39kg	19kg	20kg	28kg	13kg	15kg
リン酸	28	28	—	20	20	—
カリ	39	19	20	27	12	15
施用期	—	定植 10日前		—	定植 10日前	

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 追肥は、3段果房着果後から20日に1回程度に、遅れないように1回当たり窒素成分で1.5～2kgを施用する。
その他は丸トマトに同じ。

5. ナス（促成、夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地域……佐賀平坦（促成） 佐賀北部山間（夏秋） 白石平坦（促成）
天山松浦（促成、半促成） 国見山麓（促成）
- 2) 土壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当たり 15,000kg（促成）、8,000kg（夏秋）
- 4) 改善目標
立地条件とナスの発育相や養分吸収の実態に適応した合理的な施肥と土壌管理を行い諸障害を防止して良品を増収する。

5) 施肥量

(10a)

区 分	促 成			夏 秋 (露地)		
	総量 (成分)	元 肥	追 肥	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	70kg	30kg	1 回当たり3 kg以内とする	50kg	25kg	1 回当たり3 kg以内とする
リ ン 酸	30	30		25	25	
カ リ	45	20	1 回当たり3 kg以内とする	35	20	1 回当たり3 kg以内とする
施 用 期	—	定植前 10～20日	—	—	定植前 10～20日	—

6) 施肥設計上の要点

- (1) 土壌病害を防ぎ、諸病害を回避するため接木栽培を行う。
- (2) 生育期間が長期におよぶので根群の機能を高め草勢を維持するように排水を促進し高畦づくりとする。
- (3) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (4) 好適 pH6.0～6.5、EC施肥前 0.3ms 以下 生育中 0.7ms
- (5) 窒素の肥切れと乾燥は禁物で、元肥には緩効性肥料を主体に追肥は速効性肥料や液肥を利用する。特に乾燥時の灌水は効果が高い。
- (6) ナスは多肥となるので1回の施肥量に注意し、濃度障害と低温期のアンモニアガス障害を予防する。
また、苦土欠乏症が多いので、カリの多施をさけ、発生時は苦土剤の葉面散布を行う。
- (7) 連作ハウスでは、土壌分析に基づいて元肥量を決定する。
- (8) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培での窒素成分量は15%程度が削減可能である。

6. ピーマン (夏秋) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間、天山松浦、国見山麓
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10a 当たり 7,000kg
- 4) 改善目標

立地条件とピーマンの発育相や養分吸収の実態に適応した合理的な施肥と土壌水分管理を行ない着果障害を防止して良質品を増収する。

5) 施肥量 (雨よけ)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥				
			1 追	2 追	3 追	4 追	5 追
窒 素	40kg	20kg	4kg	4kg	4kg	4kg	4kg
リ ン 酸	35	35	—	—	—	—	—
カ リ	40	20	4	4	4	4	4
施 用 期	—	定植10日前	定植30日後	1追30日後	2追20日後	3追20日後	4追20日後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 生育期間が長いので根群の機能を高め草勢を維持するため、ほ場の排水を図ると同時に乾燥期の保水性をよくする。
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) 好適 pH6.0～6.5
- (4) 作畦後乾燥防止のためマルチ又は敷ワラを行う。
- (5) 石灰欠乏症状の発生初期に石灰資材の葉面散布を行う。

7. イチゴ (促成) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 4,000kg
- 4) 改善目標

濃度障害に弱いので元肥の種類を選択と施用法に注意する。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	25kg	15kg	1回当たり2kg以内とする
リ ン 酸	21	21	
カ リ	18	11	1回当たり2kg以内とする
施 用 期	—	植付15日以上前	—

注) 「いちごさん」については、栽培マニュアルを参照。

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。ワラ類を施用する場合は、腐熟を進め過乾燥を防ぐため、除塩を開始する前に施用しておく。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 元肥は定植 15 日前に全層施用し、持続的な長期間の肥効が期待できるように緩効性肥料を主とする。
- (4) 2 追以降は液肥を使用し、多用をつつしむ。

- (5) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培では窒素分量の15%程度が削減可能である。

8. タマネギ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 6,000kg (セットタマネギ 10 a 当たり 3,000kg)
- 4) 改善目標
 - (1) 冬期間の干害をさげ、増収できるよう、リン酸を元肥に施用し、切ワラを2月以降に散布する。
 - (2) 多収で貯蔵能力の高いたまねぎが生産できるよう施肥基準を励行する。
- 5) 施 肥 量

露地栽培 (10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	25kg	7.5kg	10kg	7.5kg
リ ン 酸	20	20	0	0
カ リ	20	10	10	0
施 用 期	—	11月中旬	1月上旬	3月上旬

マルチ栽培 (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	22kg	22kg
リ ン 酸	18	18
カ リ	18	18
施 用 時 期	—	11月中旬

トンネル栽培 (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	20	20
カ リ	20	20
施 用 時 期	—	11月上旬

秋冬どり栽培 (セット栽培) (10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	18	18
カ リ	18	18
施 用 時 期	—	8月中旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施用する。
- (4) 追肥は施肥溝をきらずに施用し、覆土をかねて溝土を土入れする。
- (5) 止肥の時期はおくれないようにする。
- (6) 上場および圃場整備直後の水田は、リン酸を30kg以上施用する。

9. 小ネギ（周年）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土、埴土
- 3) 収量目標……5,000kg（3作）
- 4) 改善目標

小ネギは浅根性で、根の酸素要求量が大きいため、耕土は深く、良質な有機物によって保水性、通気性、排水性の良い土壌を作る。

耕起は丁寧に碎土し、畦面を均平に整地する。

また、適正播種量を守り、ムラのない適正なかん水量で発芽揃いを良くする。

- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	20	—
カ リ	20	20	—
施 用 期			本葉2葉頃

- 6) 施肥設計上の要点

- (1) 初作地では、窒素成分量（追肥を含む）30kg/10 a を目安とする。
- (2) 好適 pH6.0～6.5、EC生育中 0.7ms 施肥前 0.3ms
- (3) 冬季の作期は長くなり、窒素吸収量も多くなるので、元肥窒素量は 20kg/10 a を目安とする。
- (4) 良質な堆肥等有機物を連用し、土壌物理性の維持を図る。
- (5) 一般に、連作圃場は窒素、塩基類、リン酸等が集積しているため、定期的な土壌診断の結果に基づき適正な土壌改良資材（塩基性資材等）による改善と適正な施肥を図る必要がある。
- (6) 専用の肥効調節型肥料を用いた場合、夏～夏秋季の作付では2作1回施肥で、窒素総量の10～20%程度が削減可能である。

10. 根深ネギ（春まき）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……沖積性の壤土～砂壤土
- 3) 収量目標……3,000kg
- 4) 改善目標

(1) 軟白部を長くするため土寄せを行うので、土層が深く、排水、保水性に優れた土壌が適している。

(2) 乾燥には比較的強いが多湿には弱く、過湿では根の発育を阻害し、生育が抑制されるため、排水対策等を講じる必要もある。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追	3 追	4 追
窒 素	25kg	5kg	7.5kg	5kg	3.7kg	3.8kg
リ ン 酸	20	15	3	2	0	0
カ リ	20	10	2.5	2.5	2.5	2.5
施 用 期			定 植 後 20~30日	ほぼ、1月毎		

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0~7.0
- (2) 土作り完熟堆肥を 10 a 当り 2 t と苦土石灰等の石灰資材を施用する。
- (3) 幼苗期の苗は肥料障害を受けやすいので、定植時など肥料が根に直接触れないようにする。
- (4) 追肥は畝間に施用し、その後、土寄せする。
- (5) 3年以上の連作では生育不良となりやすいので、完熟堆肥の施用や深耕を行ない、2年以上を休作する。

11. ワケギ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土~埴土
- 3) 収量目標……1,000kg/10 a (1作)
- 4) 改善目標

植え付け後は十分な灌水を必要とするので、排水性が良く、耕土が深くて有機質に富む土壌が適している。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	20	
カ リ	20	15	5
施 用 期			草丈15~20cm時

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0~7.0
- (2) 酸性に弱いので、石灰資材の施用により酸性の矯正を行う。
- (3) 幼根は肥料あたりしやすいので、元肥の過剰施用は避ける。
- (4) 完熟堆肥を 3~4 t /10 a 施用するとともに、深耕を行い、土づくりに努める。
- (5) 追肥は葉色を見ながら加減する。

12. アスパラガス（ハウス）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 土作りを徹底し、雨よけ施設の導入により秀品を増収する。
 - (2) 通風採光を良くし、株を充実させる。
 - (3) 排水を良くする。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

1 年 生			2 年 生 以 降			
区 分	総量 (成分)	元 肥	区 分	総量 (成分)	冬 肥	追 肥
窒 素	21kg	21kg	窒 素	50kg	18kg	32kg
リ ン 酸	25	25	リ ン 酸	44	26	18
カ リ	20	20	カ リ	36	18	18

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 土壌診断に基づく施肥、土づくりに努める。特に家畜糞堆肥等を用いる場合は、土壌のECや連用によるカリの蓄積に注意し、過剰施用は避ける。
 - (2) 収穫期間中は収穫量に見合った施肥を行い、その量は 250～300kg に対し窒素で約 3 kg とする。また最終は 10 月中旬までとする。
 - (3) 好適 pH6.0～6.5
 - (4) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。ただし、生育状況によっては追肥を考える。

13. ハクサイ（冬どり）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 8,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 生育期間は長いが、10 月～11 月の比較的温暖な時期に生育を促進できるよう元肥重点とする。
 - (2) 連作による地力低下防止のため、有機物の増施や石灰、微量元素剤の施用。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	30kg	20kg	5kg	5kg
リ ン 酸	20	20	0	0
カ リ	25	15	5	5
施 用 期	—	9月上旬	10月上旬	結 球 始

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH5.5～6.5
- (3) 収穫期の裂球を防止するため止肥を適期に施用する。
- (4) 土のリン吸収係数が高く（1,000 以上）有効態リン酸が少ないところ（7 mg 以下）ではリン酸を本施肥量の 50% 増とする。

14. チンゲンサイ（周年栽培、施設）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……2,500kg/作
- 4) 改善目標

土壌には幅広く適応するが、根は細く、深く伸長するので堆肥等施用で排水性良好な深い有効土層を確保する。

花芽分化は種子感応性で、13℃以下で分化し、その後の高温長日条件（10 時間以上）で抽台する。冬期には播種から生育初期の温度（日平均 15℃以上）確保が重要である。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	10kg	10kg
リ ン 酸	10	10
カ リ	10	10
施 用 期	—	定植前5日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 比較的酸性土壌に強いが、石灰の要求量が多いので苦土石灰等を 10 a 当り 100～200kg と堆肥を 3～4 t/年（2 回以上に分施）全層施用する。
- (2) 好適 pH5.5～6.5
- (3) 圃場は通風、排水の良好な場所が適する。
- (4) 一般平坦地では、夏秋出しで生育期間が 40～60 日と短いために、元肥中心の施肥とす

る。

(5) 連作の場合は、元肥施用前に土壌診断を行ない、その量を決定する。

15. キャベツ（冬どり・秋どり）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦、上場
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 6,000kg
- 4) 改善目標……良質多収をするために元肥に重点をおいた施肥を行なう。
- 5) 施肥量（秋どり）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥	
			1 追	2 追
窒 素	25kg	13kg	6kg	6kg
リ ン 酸	15	10	5	—
カ リ	20	10	5	5
施 用 期	—	定植10日前	定植10日後	結 球 始

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 発育初期の高温乾燥による吸肥力の低下を防ぐため、畦上に敷ワラを励行する。
- (4) 土のリン酸吸収係数が高く（1,000 以上）有効態リン酸が少ないところ（7 mg 以下）ではリン酸を本施肥量の 50%増とする。
- (5) 冬どりキャベツは栽培期間が長いため、追肥回数を増やす。2 追は定植後 40～50 日目、3 追は結球始めに行なう。

16. ブロッコリー（早出し、普通）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀平坦、上場
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 1,500kg（頂花蕾 600kg、側花蕾 900kg）
- 4) 改善目標……早出しの良質多収をする場合は元肥重点（7～8割）

5) 施肥量（頂花蕾、側花蕾どり）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥			
			1 追	2 追	3 追	4 追
窒 素	25kg	12kg	3kg	3kg	4kg	3kg
リ ン 酸	20	16	2	2	—	—
カ リ	25	12	3	3	4	3
施 用 期	—	定植10日前	定植10日後	1 追30日後	2 追30日後	3 追30日後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に施用し、深耕して全層に施用する。
- (4) 定植後の高温乾燥は根群の伸長が低下するので、畦面に敷ワラを励行する。
- (5) 頂花蕾収穫（早出）の場合は2追までとする。

17. レタス（夏秋、冬春）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……佐賀北部山間(夏秋)、県内平坦（冬春）

2) 土 壌……壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg

4) 改善目標

- (1) 生育期間が短いので元肥重点とし初期生育を促進する。
- (2) 連作による地力低下防止のため、有機物の増肥と石灰、微量要素剤の施用。

5) 施肥量（夏秋レタス）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	20kg	20kg
リ ン 酸	15	15
カ リ	20	20
施 用 期	—	定植5～7日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH6.0～6.5
- (3) 夏秋レタスの1年3作の場合は2作目を本施肥量の30%減とする。
- (4) 冬春レタスの袖ヶ浦については、本施肥量の10～20%減とする。

18. ホウレンソウ（雨よけ）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……佐賀北部山間、佐賀平坦
- 2) 土 壌……砂壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg（3作）
- 4) 改善目標
 - (1) 一斉発芽と揃いを良くし順調に生育させるため、土づくり、土壌水分の保持に努める。
 - (2) 夏季の高温時は、寒冷紗等を張り温度を下げる。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	15kg	15kg
リ ン 酸	20	20
カ リ	9	9

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 p H6.0～7.0、栽培期間中の好適 E C 0.5ms
 - (3) 2作目より土壌診断結果に基づき施肥する。
 - (4) 秋まき露地栽培は元肥のカリを 15kg とする。追肥は本葉 3～5 枚時及び 10 枚時の 2 回行う。1 回の追肥量は窒素で 3 kg とし、硝酸態窒素とする。

19. バレイショ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……上場
- 2) 土 壌……埴土、埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 春バレイショでは、肥料の吸収が早まるように局所施肥等を行い、初期生育を促進する。
- 5) 施 肥 量

秋バレイショ

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	25	25	—
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	定植10日前	萌 芽 始

春バレイショ(マルチ)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥
窒 素	18kg	18kg
リ ン 酸	25	25
カ リ	18	18
施 用 期	—	定植10日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 強酸性の圃場は石灰類の施用により適正な pH（好適 pH 5.0）に矯正する。ただし、そうか病の発生が予想される圃場については、石灰類の施用による pH の上昇に注意する。

20. ショウガ [【目次に戻る】](#)

- 1) 地域……杵島山麓、多良岳、七山
- 2) 土壌……埴壤土、埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
堆肥等の有機物の施用による地力の維持
- 5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	30kg	15kg	7.5kg	7.5kg
リ ン 酸	20	20	—	—
カ リ	30	15	7.5	7.5
施 用 期	—	植付10日前	萌芽揃い後	7月下旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 追肥は畦の両肩の部分に施し、土寄せをかねて覆土する。
- (4) ショウガの根群は分布が浅く特に乾燥に弱いので2追終了後は敷ワラを多用し保水につとめる。

21. サトイモ [【目次に戻る】](#)

- 1) 地域……佐賀北部山間、天山松浦山麓、上場
- 2) 土壌……壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 追肥や土寄せ作業は適期に行い、収量の安定と品質の向上を図る。
 - (2) 水田作の場合は土層改良を行い、排水性を高め、根ぐされ等による生育障害を防止する。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	25kg	15kg	5kg	5kg
リ ン 酸	15	12	3	—
カ リ	20	12	4	4
施 用 期	—	植付10日前	萌芽揃い後	7月上旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 5.0～6.5
- (3) マルチ栽培は施肥量を 30%減とし、緩効性肥料などを主体とした全量元肥とする。
- (4) 土のリン酸吸収係数が高く (1,000 以上) 有効態リン酸が少ないところ (7 mg 以下) ではリン酸を本施肥量の 50%増とする。

22. カンショ (早掘、普通) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……上場
- 2) 土 壌……埴土、埴壤土
- 3) 収量目標……10 a 当たり早掘り 1,500kg、普通 2,000kg
- 4) 改善目標……健苗育成と適期植付並びに商品性の向上
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥
窒 素	5kg	5kg
リ ン 酸	15	15
カ リ	20	20
施 用 期	—	定植7日前

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施用する。
- (4) 前作の残肥や堆肥の種類によっては、元肥量に注意する。

23. レンコン [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……白石平坦
- 2) 土 壌……埴 土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg

4) 改善目標

腐敗病発生のおそれのある地帯は、冬期に湛水しておく。

5) 施肥量

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	35kg	28kg	7kg
リ ン 酸	25	25	—
カ リ	35	28	7
施 用 期	—	植付15日前	6月上旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 腐敗病の防除のため、元肥に石灰窒素を用いる場合は植付 30 日以前とする。
- (3) 好適 pH 5.5～6.5
- (4) 新植田は窒素を 10～20%増施する。
- (5) ハウス栽培では全量元肥とし、窒素 15～17kg、リン酸 20～25kg、カリ 20～25kg とする。

24. スイートコーン（普通、トンネル）[【目次に戻る】](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……砂壤土～埴土

3) 収量目標……1,500kg

4) 改善目標

土壌の適応性は広いが、深根性作物であるため、土層を深く保ち、低湿地では高畦とし排水条件を整備する。微量元素の欠乏がないよう堆肥の施用を行う。

5) 施肥量（トンネル）

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	25kg	18kg	4kg	3kg
リ ン 酸	20	20	—	—
カ リ	25	18	4	3
施 用 期	—	—	播種後40日	1 追後20日

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 5.5～6.5
- (3) 雌穂抽出時期の乾燥肥切れは、収量品質の低下となる。
- (4) 露地栽培では本施肥量の 30%増とする。

25. エンドウ(普通、露地抑制) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……2,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 気籾期以後の排水に留意し、後半の叢生維持に努める。
 - (2) 連作をさげ適期播種を行い越冬時の耐寒性をつける。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量(成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	6kg	4kg	1kg	1kg
リ ン 酸	10	10	—	—
カ リ	10	7	1.5	1.5
施 用 期	—	—	越 冬 前	開 花 期

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH6.0～6.5

26. ソラマメ(普通) [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……1,000kg
- 4) 改善目標

必ずマルチ高畦栽培として、着莢期以後の排水を良くし後半の草勢維持に努める。
- 5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総量(成分)	元 肥	1 肥
窒 素	7kg	4kg	3kg
リ ン 酸	10	10	—
カ リ	10	6	4

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 pH6.0～6.5
 - (3) カリ不足は後半の生育を阻害し、地上部の枯れ上りが早い。

27. モロヘイヤ（秋冬、春夏）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……天山松浦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴壤土
- 3) 収量目標……1,500～2,000kg
- 4) 改善目標
 - (1) 冬期の草勢低下を防ぐため、電照や加温を行う。
 - (2) 土壌水分や施肥の適正化に努め、根傷みを起こさないようにする。
 - (3) 排水性のよい圃場で栽培する。
- 5) 施 肥 量（施設）

(10 a)

区 分	総量（成分）	元 肥	追 肥
窒 素	55kg	24kg	1回当たり3kg以内とする
リ ン 酸	40	24	
カ リ	40	24	1回当たり3kg以内とする
施 用 期		定植10～20日前	

- 6) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適pH 6.0～6.5
 - (3) 冬期の草勢低下や根傷みを防止し、根の活性を高めるため、土づくりに努める。
 - (4) 窒素切れと土壌の乾燥は禁物なので、追肥は適宜遅れないように施用する。
 - (5) 低温期のガス害に注意する。

28. パセリ（夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴壤土～埴土
- 3) 収量目標……2,500kg
- 4) 改善目標

発芽や生育適温は15～20℃で、25℃以上では発芽不良や生育は徒長傾向となり、品質も低下するので施設の温度管理に注意する。

耕土が深く、通気性や排水性のよい土壌が好ましい。また、有機質に富んだ保水力のある肥沃な土壌が適する。夏秋どりで地下水位の高い圃場は暗渠等による排水対策を実施しておく。

5) 施肥量

(10 a)

区分	総量(成分)	元肥	1 追	2 追	3 追
窒素	60kg	26kg	15kg	10kg	9kg
リン酸	40	26	9	2	3
カリ	40	22	9	6	3
施用期			10葉期以降～		

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～6.5
- (2) 直根性であるので、有機物を 10 a 当り 3～4 t 施用し、深耕を行ない、排水性の良い膨軟な土壌とする。
- (3) 元肥は土壌診断結果に基づき、1 追は間引き後に施用する。その後の追肥量は生育に応じ、適宜調整する。
- (4) 高温、乾燥には弱いので、適宜かん水を行ない、地温上昇と乾燥を防ぐ。

29. コマツナ (雨よけ) [\[目次に戻る\]](#)

1) 地域……佐賀平坦、佐賀北部山間

2) 土壌……壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 2,000kg

4) 改善目標

土壌には幅広く適応するが、有機質に富む粘質な土壌か沖積層の壤土地帯が適する。保水性や排水性が良好な土壌を作るため、堆肥の施用等による土づくりに努める。

5) 施肥量

(10 a)

区分	総量(成分)	元肥	追肥 1	追肥 2
窒素	15kg	7kg	4kg	4kg
リン酸	10	10	0	0
カリ	18	9	4.5	4.5
施用期				

6) 施肥設計上の要点

- (1) 比較的酸性土壌には強いが、石灰の要求量が高い野菜に入るので、苦土石灰等の石灰資材を 10 a 当たり 100～200kg 程度施用する。
- (2) 好適 pH5.0～6.7
- (3) 良質な堆肥等の有機物の施用による土づくりに努める。

30. スイカ（半促成、露地）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……上場、天山松浦、国見山麓、佐賀平坦、白石平坦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 5,000～6,000kg
- 4) 改善目標

立地条件を考慮し、スイカの生育相によく合致した合理的施肥の実施によって蔓ボケ現象を防止し、良質のものを多収する。

5) 施肥量（露地）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
			1 追	2 追	3 追
窒 素	20kg	6kg	2kg	5kg	7kg
リ ン 酸	15	13	2	0	0
カ リ	15	4.5	1.5	4	5
施 用 期	—	定植20日前	定植直後	着 果 後	玉 肥

6) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 p H5.8～6.8
- (2) 緩効性肥料を主とする場合は元肥に窒素の 60%を施す。着果前は特に過窒素にならないよう注意する。
- (3) 接木スイカの場合は本基準より 20%減とする。
- (4) 土の燐酸吸収係数が高く（1,000 以上）有効態燐酸が少ないところ（7 mg 以下）では燐酸を本施肥量の 50%増とする。

31. メロン（半促成）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……県一円
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 3,000kg
- 4) 改善目標

メロンの生育相によく合致した土壌水分管理と合理的な施肥の改善によって蔓ボケ現象を防止、良質のものを多収する。

5) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	15kg	7.5kg	7.5kg
リ ン 酸	10	10	0
カ リ	10	5	5
施 用 期	—	定植10日前	着 果 直 後

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 元肥は緩効性肥料を主体とするのがよい。着果後は過窒素にならないように注意する。
- (4) 追肥は生育に応じて蔓先に施し、土とよく混和して土をよせ、うね幅をひろげる。
- (5) 接木の場合は本施肥量より 20%減とする。
- (6) ネットメロン類は本施肥量より 20%減（追肥）とする。
- (7) 一番果のみの収穫の場合は追肥を 50%減とする。
- (8) 二作型の場合、秋メロンは元肥無施用とする。

32. カボチャ（抑制、トンネル、普通）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……白石平坦、上場、天山松浦、佐賀平坦
- 2) 土 壌……砂壤土～埴土
- 3) 収量目標……1,300kg
- 4) 改善目標

健苗育成に努め植痛みを少なくし、朝早く人工交配を行い確実に着果させ蔓ボケ現象を防ぐ。

5) 施肥量

抑制 (10 a)				トンネル、普通		
区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	12kg	7kg	5kg	19kg	13kg	6kg
リ ン 酸	7	7	—	13	13	—
カ リ	12	7	5	19	13	6
施 用 期	—	—	着 果 期	—	—	着 果 期

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H5.0～6.5

33. インゲン（抑制、半促成）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……壤土～埴土
- 3) 収量目標……10 a 当たり 2,000～3,000kg
- 4) 改善目標

過繁茂による結実不良に注意する。

5) 施肥量

矮性種

(10 a)

区 分	総量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	15	15	0
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	播種5日前	開花期～収穫期

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 元肥は全面に全層施肥とする。

34. ニンニク (普通) [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……上場

2) 土 壌……埴壤土～埴土

3) 収量目標……10 a 当たり 1,500kg

4) 改善目標

- (1) 土壌改良のための堆きゅう肥を必ず施用する。
- (2) 増収と品質向上のためマルチ栽培を行う。
- (3) 後期追肥に起因する二次分球防止

5) 施肥量

(嘉定種)

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	1 追	2 追
窒 素	22kg	18kg	2kg	2kg
リ ン 酸	28	22	3	3
カ リ	26	20	3	3
施 用 期	—	定植10日前	11月中旬～12月上旬	1月中旬～1月下旬

6) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 p H6.0～6.5
- (3) 追肥のおくれは二次分球の原因となるので必ず、1月中旬までに施用を終わる。
- (4) 元肥は全面に全層施用する。
- (5) マルチ栽培の場合は全量元肥とし窒素は本施肥量の30%減とする。
- (6) 追肥1・2は土入れと同時に行なう。
- (7) 土のリン酸吸収係数が高く(1,000以上)有効態リン酸が少ないところ(7mg以下)ではリン酸を本施肥量の50%増とする。

Ⅲ 花き施肥 [\[目次に戻る\]](#)

この施肥量は従来の主要花き施肥量を土台に、試験研究機関や現地での試験結果等を加味して主要品種を対象に設定したものである。各地域において品種や気象条件、土壌、耕種方法等が異なる場合には、この施肥量を参考にして地区ごとに施肥計画をたてること。特に花きは品種が多様なことから、新しい品種を導入する場合などは、品種の特性を把握して、施肥量を加減することが必要である。

◎施肥量を設定した作物の作型と主要品種

品 目	作 型	播 種 (さし芽)	定 植 期	収 穫 期	主 要 品 種
キ ク	施設				精の一世 神馬
	夏秋ギク	3～5月	4～6月	6～9月	
	秋ギク	7～10月	8～11月	10～5月	
	露地・雨よけ				
	夏ギク	9～3月	10～4月	5～7月	
	夏秋ギク	3～5月	6～7月	7～9月	
	秋ギク	5～6月	6～7月	10～11月	
バ ラ	加温周年	—	3～5月	周年	ローテローゼ
カ ー ネ ー シ ョ ン	加温周年	5～6月	6～7月上旬	10～5月	フランセスコ
ト ル コ ウ ギ キ ョ	促成	5～6月	9月	12～2月	ボヤージュ、ボン ボヤージュ系 セレブ系 ほか
	半促成	6～7月	10月	4～5月	
	夏秋	12～3月	3～5月	7～9月	
ホ オ ズ キ	普通	—	11月～1月	7～8月	丹波ホオズキ 佐賀H5号
ス カ シ ユ リ	無加温	—	10月	4～5月	コネチカット キング
オ リ エ ン タ ル ハ イ ブ リ ッ ド	加温周年	—	周年	周年	カサブランカ
グ ラ ジ オ ラ ス	促成	—	9月～12月	6～9月	トラベラ
	普通	—	3～5月	7～8月	
	抑制	—	7～9月	12～1月	
ス ト ッ ク	11～12月出	7～8月	8～9月	11～12月	高波、早麗
シンテッポウユリ	普通	12～1月	4～5月	7～9月	雷山系
シ ャ ッ コ ン カ ス ミ ソ ウ	秋冬切り	—	8～9月	10～12月	雪ん子
ス タ ー チ ス シ ヌ ア ー タ	促成	—	9月	11～4月	培養系
	半促成	—	10月	1～5月	
ス イ ー ト ピ ー	冬春出荷	8月	9月	11～4月	セレモニー系

1. キク（施設、露地・雨よけ）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地域……県内一円
- 2) 土壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

塩類集積と連作障害の回避のため深耕と有機物の施用及び適正な施肥管理を行う。

4) 施肥量

○ 施設

マルチ栽培 10 a 当り			ノンマルチ栽培 10 a 当り				
区 分	総 量 (成 分)	元 肥	総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
					1	2	3
窒 素	25kg	25kg	30kg	14kg	6kg	6kg	4kg
リ ン 酸	20	20	25	16	3	3	1
カ リ	22	22	26	11	6	6	3
施 用 期		定植20～ 30 日 前		定植10～ 20 日 前	活 着 後 (摘心前)	摘 心 後	花 芽 分 化 前

○ 露地・雨よけ

区 分	総 量 (成 分)	元 肥
窒 素	25kg	25kg
リ ン 酸	25	25
カ リ	25	25
施 用 期		定植20～ 30 日 前

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 有機質肥料や緩効性肥料を主体とする。
- (4) キクは濃度障害に弱いので、前作の残肥料を把握した上で、施肥量を決定する。
(とくに砂壤土では注意する。) また、一時的な多用は禁物である。
- (5) ノンマルチ栽培の場合、追肥は葉色等を観察しながら適宜施用する。第2回追肥は摘心後に行い、第3回追肥は花芽分化前に施用する。第3回の追肥時期が遅れると切花の品質を劣化させるので注意する。

- (6) マルチ栽培の場合、緩効性肥料を中心に全量元肥とする。ただし、生育後期は生育状況に応じ追肥を行う。
- (7) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。この場合、窒素成分量で1割程度が削減できる。
- (8) 夏秋ギク（「精の一世」等）については、施肥量を1/2減肥する。

2. バラ（加温周年型：養液栽培）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地域……県内一円

2) 改善目標

適正な施肥を行い生育と切花の安定収入をはかる。

3) 施肥量

(1) 多量要素の処方

施肥成分		施肥量	
		(me/L)	(ppm)
窒素	NO ₃ -N	12.0	168
	NH ₄ -N	1.0	14
りん (P)		3.0	31
加里 (K)		6.0	235
石灰 (Ca)		6.0	120
苦土 (Mg)		3.0	37
硫黄 (S)		3.0	48

(2) 微量要素の処方 (ppm)

施肥成分	施肥量
鉄	3.0
マンガン	0.5
硼素	0.5
亜鉛	0.05
銅	0.02
モリブデン	0.01

4) 施肥設計上の要点

- (1) 使用する源水を分析し、各メーカーのロックウールシステムに適合した養液管理を行なうのが一般的であるが、ECやpH測定は随時行ないチェックを怠らないようにする。
- (2) 季節別濃度管理

夏季の高温・強光期には窒素、リン酸、カルシウム等の吸収量は低下し、冬季には吸収量が高くなるので、培養液管理は、秋から冬にかけては給液濃度を徐々に上げてECを1.0~1.5mS程度として株作りを行なう。
- (3) 銅欠乏、マンガン過剰に弱い品種群は、ノブレス、パレオ90等で、ややマンガンの高

濃度を必要とする品種群はローテローゼ、ティネケ等である。マンガン濃度は、ノブレスタイプで 0.3～0.5ppm、ローテローゼタイプで 0.5～0.7ppm が適正值とされている。

(4) 廃液については有効利用および、適正処理に努める。

3. カーネーション（加温周年型）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

長期間切り花栽培に適した合理的施肥法と切花品質を改善する。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (分施)
窒 素	60kg	10kg	50kg
リ ン 酸	40	30	10
カ リ	60	10	50

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。ベンチ栽培の場合、有機質資材を容積比 20%程度施用する。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5、EC 施肥前 0.2ms/cm 以下、生育初期 0.5ms/cm、生育中 0.6～0.8 ms/cm
- (3) 連作圃場では、窒素、リン酸、塩基等の集積がみられるので、土壌診断の結果に基づいた土壌改良と施肥が重要である。
- (4) 施肥窒素の利用率は 80%と高く、少ない量でも十分に吸収されるため、過剰な施肥は避ける。
- (5) 活着後～8月上旬までの初期生育段階では、土壌の養分条件により液肥で対応し、適正施肥に努める。
- (6) 生育期間が長く品質保持のために追肥は液肥を中心とする。1回当りの液肥施用量は窒素成分で 3 kg/10 a を限度として、生育状況に応じて施用する。ただし、夏期においては控えめとし、秋期には有機質肥料を施用する。
- (7) 土壌消毒（蒸気）前の窒素施用はさける。
- (8) 重粘土地帯の養液土耕栽培では、窒素施肥量の 3～4 割程度、灌水量の 2～3 割程度が削減可能である。

4. トルコギキョウ（促成、半促成、夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標
健全育成と品質の向上を図る。
- 4) 施 肥 量

(10a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	10kg	5kg	5kg (液肥400～600倍液施用)
リ ン 酸	8	5	
カ リ	10	5	

- 5) 施肥設計上の要点
 - (1) 好適 pH6.5～7.0
 - (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (3) トルコギキョウはカルシウム欠乏による葉先枯れが発生しやすいため、窒素過多は避け、カルシウム資材の葉面散布を実施する。
 - (4) 追肥は生育に応じて出蕾始までに3～4回施用する。

5. ホオズキ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内全域
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標
排水がよく、保水性のある肥沃な土壌が適地である。また、連作を嫌うので、できるだけ連作を避ける。
- 4) 施肥量

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	15	5
カ リ	20	15	5

- 5) 施肥設計上の要点
 - (1) 好適 pH6.0～6.5
 - (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (3) 窒素肥料の不足は樹勢が弱くなり着果不良の原因となりやすい。
 - (4) 着果時期の過乾燥は落果の原因となりやすいので乾燥させない。
 - (5) 追肥は4月に行うが、樹勢が悪い場合は5月にさらに行う。

(6) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。

(7) 雨よけや促成栽培の場合は、20%程度増肥する。

6. スカシユリ [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……埴土～壤土

3) 改善目標

施肥を適正に行い、根の発育、草たけの伸長をよくし品質の向上をはかる。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	15	5
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	植付10日前	

5) 施肥設計上の要点

(1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

(2) 生育に合わせ、液肥等で追肥を行う。

(3) pHは6～6.5の範囲とする。

7. オリエンタルハイブリッド [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……保水性、排水性に富み、有機物含量の多い砂壤土

3) 改善目標

上根が発達した1か月以降に本格的な吸収が始まるので、生育に応じて追肥を行う。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	16kg	8kg	8kg
リ ン 酸	20	17	3
カ リ	16	8	8
施 用 時 期	—	植付10日前	

5) 施肥設計上の要点

(1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

(2) 生育をみながら、1回当たり2kgを目安として液肥で追肥する。

(3) pHは、5.5～6.5の範囲とする。

- (4) 大球使用の場合は、液肥する。

8. グラジオラス（促成、普通、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標
切花品質の向上。
- 4) 施肥量（普通）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (分施)
窒 素	17kg	12kg	5kg
リ ン 酸	14	14	—
カ リ	13	9	4
施 用 時 期	—	定植15～20日前	本 葉 4 枚

- 5) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 好適 p H6.0～6.5
 - (3) 元肥は全層施肥とする。
 - (4) 促成栽培の施肥量は本施肥量の 20%増とする。
 - (5) 抑制栽培の施肥量は普通栽培に準ずるが寒害を受けやすいので肥切れしないようにする。

9. ストック [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標
有機質資材の施用と適正な施肥を行ない生育と切花品質の向上をはかる。
- 4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (分施)
窒 素	25kg	20kg	5kg 液肥400～ 600倍液を 施用
リ ン 酸	20	20	
カ リ	25	25	

- 5) 施肥設計上の要点
 - (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 - (2) 土壌 p Hを、6.0～6.5 になるよう定植前に石灰質資材で調整する。

- (3) ホウ素欠乏が発生しやすいので pH の調整を行うとともに、土壌診断をもとにホウ素資材を施用するか、葉面散布も有効であるので応急的に施用する。

10. シンテッポウユリ [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……埴土～砂質壤土

3) 改善目標

有機質資材の施用と適正な施肥を行い切花品質の向上をはかる。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (3回以上の分施)
窒 素	35kg	20kg	15kg
リ ン 酸	30	30	—
カ リ	35	20	15

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 追肥は6月上旬から生育に応じて施肥し、1回の施用量は窒素成分で5kgを限度として数回に分けて施用する。
- (3) 好適 pH 6.0～6.5

11. シュッコソウ [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……埴土～壤土

3) 改善目標

作土は深耕し、低湿地は絶対にさげ、長期間切花栽培に適した施肥法と切花品質の向上を図る。

4) 施 肥 量

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	16kg	12kg	4kg
リ ン 酸	16	16	〔 草丈30cm位 までに液肥 で施用 〕
カ リ	16	16	

5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH 6.5～7.0
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

12. スターチス・シヌアータ（促成、半促成）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

窒素過多を避け品質の向上を図る。

4) 施 肥 量

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	12kg	8kg	4kg
リ ン 酸	12	12	〔液肥で施用する〕
カ リ	8	8	

5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH6.0～6.5
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) 窒素肥料の多用をさけ茎が軟弱徒長しないように注意する。
- (4) 乾燥、および pHが不適な場合ホウ素欠乏が発生しやすいので、土壌診断をもとにホウ素資材を施用するか葉面散布を応急的に行う。

13. スイートピー [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……杵島・藤津地区
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

深根性であるので有機質資材を施用し、深耕する。またできるだけ連作を避け、ECの高い場合除塩を行う。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	25kg	10kg	15kg
リ ン 酸	30	20	10
カ リ	30	15	15

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 生育初期の窒素肥料の過剰は開花遅延となるので注意する。
- (3) 曇天が続くと落蕾が発生する。落蕾の防止対策として窒素過多、カリの不足に注意する。
- (4) 追肥は草勢をみて晴天時に液肥を施用する。
- (5) 好適 pH6.5～7.0

IV 飼料作物施肥

1. イタリアンライグラス [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 品 種 (極早生種) ワセフドウ
 (早生種) ワセユタカ、タチワセ、いなずま、ゼロワン
 (中生種) タチムシャ、
 (晩生種) マンモスイタリアンB、ジャイアント、エース、テティラ
- 2) 目標収量 2回刈り 6,500kg
- 3) 施肥量

(10a)

栽培型	総 量			元 肥				追 肥
	堆 肥 等		化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等		化学肥料等		1 番刈後 (成分)
	(成分)			(散布量)	(有効分量)	(成分)		
水田裏作 貯蔵型	窒素	5.1kg	14kg	3,000kg	(窒素 5.1kg)	窒素	9kg	5kg
	リン酸	8.4kg	1kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	1kg	0kg
	カリ	14.4kg	0kg		(カリ 14.4kg)	カリ	0kg	0kg
畑(転換田) 作貯蔵用	窒素	5.1kg	14kg	3,000kg	(窒素 5.1kg)	窒素	9kg	5kg
	リン酸	8.4kg	1kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	1kg	0kg
	カリ	14.4kg	0kg		(カリ 14.4kg)	カリ	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

注) 播種量 3kg/10a

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 土壌 pH6.5 以下では土壌改良材（石灰類）で矯正する。
- (3) 水稲立毛播種の場合の元肥は、稲刈り 1 週間後に施用してもよい。
- (4) 多回刈りを行う場合、刈取毎に追肥を行う。
- (5) 追肥は、硝酸塩・カリ蓄積を勘案して、生育状況・葉色を見ながら施用する。
- (6) 家畜尿には 1 t 中に牛尿で 4～6 kg、豚尿では 2～4 kg 程度のアンモニア態窒素が含まれる。追肥として家畜尿を利用する場合は、施用量が少なくなるため、5 倍程度に希釈して施用すると良い。
- (7) イタリアンライグラス後作の水稲作では、元肥の施肥に留意する。

2. エンバク [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 品 種 スーパーハヤテ「隼」
- 2) 目標収量 4,000kg

3) 施肥量

(10 a)

栽培型	総 量			元 肥				追 肥 (成分)
	堆 肥 等 (成分)		化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等 (散布量)	元 肥 (有効成分量)	化学肥料等 (成分)		
	窒 素					窒 素		
サ イ レー ジ用	窒 素	5.1kg	6kg	3,000kg	(窒 素 5.1kg)	窒 素	4kg	2kg
	リン酸	8.4kg	0kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg	0kg		(カ リ 14.4kg)	カ リ	0kg	0kg

※牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

注 1) 播種量：8月下旬（条間 70cm の条播 7 kg、散播 8 kg）、11月中旬（5 kg、6 kg）

注 2) イタリアンライグラスと混播する場合は、イタリアンライグラスの施肥量による。

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 土壌 pH 6.5 以下では土壌改良材（石灰類）で矯正する。
- (3) 硝酸態窒素蓄積がおこりやすい作物であるので、窒素施肥に留意する。
- (4) 追肥は、晩夏播きで播種後 20 日頃、秋播きで 30 日前後に施用する。
- (5) 収穫期は、8月下旬播きで 12 月中～下旬、11月中旬播きで 6 月上～中旬である。
- (6) 家畜尿には 1 t 中に牛尿で 4～6 kg、豚尿では 2～4 kg 程度のアンモニア態窒素が含まれる。追肥として家畜尿を利用する場合は、施用量が少なくなるため、5 倍程度に希釈して施用すると良い。

3. 飼料用イネ（稲発酵粗飼料用）[\[目次に戻る\]](#)

1) 品 種 モグモグあおば、タチアオバ、たちすずか、たちあやか等
(主食用品種も流用可)

2) 目標収量 3,000kg

3) 施肥量

(10 a)

栽培型	総 量			元 肥				追 肥 (成分)
	堆 肥 等 (成分)		化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等 (散布量)	元 肥 (有効成分量)	化学肥料等 (成分)		
	窒 素					窒 素		
サ イ レー ジ用	窒 素	5.1kg	8～13kg	3,000kg	(窒素 5.1kg)	窒 素	6～10kg	2～3kg
	リン酸	8.4kg	0kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg	0kg		(カリ 14.4kg)	カ リ	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

注 1) 播種量 直播 4～5 kg/10 a 移植 4 kg/10 a

注 2) 水管理 乾田直播栽培 葉令 3～4 葉期（播種後 1 ヶ月）に入水

湛水直播栽培 播種後出芽まで落水状態とし、苗立ちを安定させる。

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 土壌 pH 6.5 以下では土壌改良材（石灰類）で矯正する。
- (3) 乾田直播にあつては、鳥害を避け、苗立ちを安定させるため、播種深度を 1～3 cm に保ち、播種後は鎮圧を実施する。
- (4) 収穫については、出穂後 10～40 日の糊熟期～黄熟期とし、機械対応を考え、早めに落水する。
- (5) 刈り遅れると脱粒しやすくなる品種もあるため、当該品種については早期（糊熟期）の収穫を行い脱粒を極力回避する。
- (6) 飼料用米には適用しない。

4. 飼料用トウモロコシ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 品 種 (早播き用) ゆめそだち
- 2) 目標収量 6,000kg
- 3) 施肥量

(10 a)

栽培型	総 量			元 肥			追 肥 幼穂形成期 (成分)	
	堆 肥 等 (成分)	化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等		化学肥料等 (成分)			
			(散布量)	(有効成分量)				
サ イ レー ジ用	窒 素	5.1kg	9kg	3,000kg	(窒素 5.1kg)	窒 素	6kg	3kg
	リン酸	8.4kg	0kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg	0kg		(カリ 14.4kg)	カ リ	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

注) 条間 70～80cm 点播の場合とする。

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 土壌 pH 6.5 以下では土壌改良材（石灰類）で矯正する。
- (3) 湿害に弱いので、排水対策に留意する。
- (4) 10～20%の範囲で、土地の肥沃度に応じて窒素およびカリを加減する。
- (5) 追肥は主幹葉数の 1/2（8～10 葉期頃）の幼穂形成期に施し、後半窒素不足にならないように留意する。
- (6) 家畜尿には 1 t 中に牛尿で 4～6 kg、豚尿では 2～4 kg 程度のアンモニア態窒素が含まれる。家畜尿を追肥として利用する場合は、施用量が少なくなるため、5 倍程度に希釈して施用すると良い。

5. ソルガム [\[目次に戻る\]](#)

1) 品 種：ソルゴー

(乾草用、青刈り用)

ヘイスーダン、ドライスーダン、シュガースリム、リッチスーダン、
タキイのハイブリッドソルゴー、元気ソルゴー

2) 目標収量 2回刈り 8,000kg

3) 施肥量

(10a)

栽培型	総 量			元 肥			追肥1	追肥2	
	堆 肥 等 (成分)	化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等 (散布量)	化学肥料等					
				(有効成分量)	(成分)	10葉期 (成分)	刈取後 (成分)		
サ イ レージ用 青刈り用	窒 素	5.1kg	13kg	3,000kg	(窒 素 5.1kg)	窒 素	5kg	3kg	5kg
	リン酸	8.4kg	3kg		(リン酸 8.4kg)	リン酸	3kg	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg	0kg		(カ リ 14.4kg)	カ リ	0kg	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

注) 条間 70~80cm 条播、または点播の場合とする。

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 土壌 pH 6.5 以下では土壌改良材（石灰類）で矯正する。
- (3) 1 回目の追肥は 10 葉期までに施し、多回刈りの場合は刈取毎に、生育状況・葉色を見ながら施用する。
- (4) 家畜尿には 1 t 中に牛尿で 4~6 kg、豚尿では 2~4 kg 程度のアンモニア態窒素が含まれる。家畜尿を追肥として利用する場合は、施用量が少なくなるため、5 倍程度に希釈して施用すると良い。

6. 夏作牧草 [\[目次に戻る\]](#)

1) 草 種 ローズグラス

2) 目標収量 6,000kg

3) 施肥量

(10a)

栽培型	総 量			元 肥			追肥1	追肥2	追肥3	
	堆 肥 等 (成分)	化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等 (散布量)	化学肥料等						
				(有効成分量)	(成分)	10葉期 (成分)	刈取後 (成分)	刈取後 (成分)		
貯蔵用	窒 素	5.1kg	19kg	3,000kg	(窒素5.1kg)	窒 素	10kg	3kg	3kg	3kg
	リン酸	8.4kg	1kg		(リン酸8.4kg)	リン酸	1kg	0kg	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg	0kg		(カリ14.4kg)	カ リ	0kg	0kg	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

4) 施肥設計上の要点

- (1) 施肥前の土壌診断に基づいて施肥設計を行うことが望ましい。
- (2) 堆肥施用は、カリおよび硝酸塩の蓄積と密接な関係があるので十分注意する。
- (3) 追肥は刈取毎に、生育状況・葉色を見ながら施用する。
- (4) 家畜尿には1 t中に牛尿で4～6 kg、豚尿では2～4 kg程度のアンモニア態窒素が含まれる。家畜尿を追肥として利用する場合は、施用量が少なくなるため、5倍程度に希釈して施用すると良い。

7. 多年生牧草 [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 草 種 (高冷地) ペレニアルライグラス、シロクローバー、アカクローバー
(低 地) バヒアグラス、シロクローバー、センチピートグラス、カーペットグラス

2) 施肥量

(10 a)

栽培型	総 量			元 肥			追肥1	追肥2	追肥3	追肥4	
	堆 肥 等		化学肥料等 (成分)	牛 糞 堆 肥 等		化学肥料等 (成分)	10葉期	刈取後	刈取後	刈取後	
	(成分)			(散布量)	(有効成分量)		(成分)	(成分)	(成分)	(成分)	(成分)
採草型	窒 素	5.1kg	20kg	3,000kg	(窒 素 5.1kg)	窒 素	8kg	3kg	3kg	3kg	3kg
	リン酸	8.4kg			(リン酸 8.4kg)	リン酸	7kg	0kg	0kg	0kg	0kg
	カ リ	14.4kg			(カ リ 14.4kg)	カ リ	5kg	0kg	0kg	0kg	0kg

※ 牛糞堆肥の有効成分量を窒素 1.7kg/t、リン酸 2.8kg/t、カリ 4.8kg/t と仮定した場合。

3) 施肥設計上の要点

- (1) 造成時には、土壌改良および地力維持の目的で、苦土石灰 400～500kg、熔燐 60 kg 内外を施用する。2年目以降は苦土石灰を 100kg、堆肥 2,000kg 内外を毎年施用し、堆肥 1 t ごとに窒素 1 kg、リン酸 2 kg、カリ 3 kg ずつ減肥する。
- (2) 家畜尿には1 t中に牛尿で4～6 kg、豚尿では2～4 kg程度のアンモニア態窒素が含まれる。家畜尿を追肥として利用する場合は、施用量が少なくなるため、5倍程度に希釈して施用すると良い。
- (3) 造成初年度の元肥は、播種時に施すこととし、2年目以降の元肥は春の萌芽前に、三要素を含む肥料を施す。

また、刈取毎に追肥を施し、2年目以降の追肥の窒素とカリは、ほぼ同量の分施とする。

- (4) マメ科優占の草地では窒素を減じ、イネ科優占の草地では窒素を増肥する。